

研究開発5 大学等との連携

1 目的と期待される効果

(1) 目的

グローバル社会の課題について研究している大学等の教授や研究者と連携し、大学の研究室を訪問するなどの講座を「GLアクティブ」で設定して、最先端の研究に触れるとともに直接専門家の指導やアドバイスを受けることにより、グローバルな社会課題に対する関心と意欲を喚起する。また、課題研究の進め方やまとめ方の指導を受ける。

(2) 期待される効果

大学等の教授や研究者との交流を通して質の高い、現実味のある課題研究を行うことが期待できる。

2 内容

次の大学等と連携し、各講座を実施する。生徒は各自の興味・関心により希望する講座に出席する。

(1) 千葉大学

(2) 神田外語大学

(3) 筑波大学

(4) 東京外国語大学

※ 実施する主な講座

- ① グローバルな視点で捉えた言語学等に関する講座
- ② グローバルな視点で捉えた社会学等に関する講座
- ③ グローバルな視点で捉えた地理歴史等に関する講座
- ④ 課題研究の進め方や発表方法の指導講座

3 実施方法

学校設定科目「GLアクティブ」において行う。大学等の連携により受講した講座や研究室の訪問について参加した生徒については、実施後、報告書を提出し、提出された報告書及び活動の記録等を基に学校設定科目「GLアクティブ」の評価に加える。

4 検証評価方法

検証方法は、生徒及び教員に対して、講座ごとに記名式アンケートを実施する。その結果を連携した大学・学部へ提示し、大学・学部からの意見を評価に加える。

5 今年度の特色

新型コロナウイルスの流行により、過去4年間実施していたプログラムはすべて断念した。

新案として、オンラインを通じて大学と連携し、新たなプログラムに挑戦した。その内容を中心に報告する。

6 実施内容

(1) 高校生オンライン交流会（埼玉県立浦和女子高等学校と2回実施）

目的 全国各地の高校生がオンライン上で、知的対話をする。

コロナ禍であらゆる対面体験が制限される中、オンライン交流という新たなジャンルを切り開く。その実証実験も兼ね、SGH指定校同士で連携し試みた。

日時 第1回 6/20（土） 14:00～15:00

第2回 7/26（日） 13:30～16:00

密回避、分散・時差登校などの制限下であり、各自家庭からの参加。

テーマ 第1回 オンライン教育の課題と未来

第2回 地域活性化 環境問題

ツール Google meet

参加人数 各校3人から4名の参加者 ファシリテーターは職員

視聴のみの参加者は20名程度想定

進行モデル（第1回）

【ファシリテーター確認事項】

音声・画像など通信環境確認 見学者のミュート確認 映像録画の承諾確認 参加者の画

像・音声は常にアクティブ 映り込み個人情報確認

音声アクティブ教員は各校1名ずつ 計8名がアクティブ

テーマ1 自己紹介（学年・名前）&コロナ禍と自分（持ち時間 各自1分）

（10分） 佐倉3人 → 一女3人

テーマ2 オンライン教育の課題と未来（各2分）

（30分） 授業形態、教育効果、第2波に備えての改善点、他校の情報、友人の声

佐倉1人 → 一女1人 → 佐倉 → 一女…

オンライン教育関連 質問タイム まずは参加者

オーディエンスの質問はチャットで受付

内容報告

- 事前のテーマアナウンスは有効であった。それに対応した参加者の準備が大事である。
- 参加生徒からは想定していた以上に活発な発言があった。
- オンラインでは表情等での反応が示せない。よって全員に等しく発言機会の確保が重要になる。
- オンライン画面上的なアクティブな参加者は発言機会を考えると8人以内が適数といえる。

(2) 千葉大学・環境ISO学生委員会とオンライン交流会（2回実施）

目的 『環境』を考え活動する千葉大学学生とオンライン上で、知的対話をする。

大学も前期授業はすべてオンラインになっており、その体験を共有する。

日時 2年生対象日 9月3日（木） 16:00～18:00

1学年対象日 9月5日（土） 14:00～15:30

参加者 千葉大学・学生3名 本校生徒 2年生16名 1年生10名
本校生徒は環境をテーマとする課題研究班が参加
使用ツール Zoom

進行モデル（第1回 2年生対象日） 120分

1. 千葉大学学生の自己紹介（ひとり2分）
 - ・名前・学部
 - ・今、研究していること（これから研究したいこと）
 - ・コロナ禍の大学の実情、オンライン教育の実情、困りごと、ストレス
2. 本校課題研究班の中間報告と質問
 - ・発表5分 質疑10分 4班発表
3. 大学生の活動プレゼン 質疑
4. 情報交換

報告

9月3日（木）、5日（土）の両日、本校1・2年生と千葉大学環境 ISO 学生委員会の皆さんとの間で、Zoomを使い、オンライン交流が実現しました。本校の参加生徒は環境問題を研究テーマとする研究班4班で、節水や木材の有効利用、プラスチックゴミ削減や空き缶のポイ捨て解決などのテーマで発表を行い、大学生の皆さんから適格かつ建設的な助言をいただきました。また課題研究に取り掛かったばかりの1年生は、環境をテーマとする自由な討議をおこない、大きな刺激を得ることができました。



(3) 東大生とオンライン「考える会」

目的 東京大学の学生と「知的対話」を行い、多角的な思考と深い学びを体験する。

日時 9月22日（火）祝日 13:00~16:00 150分想定

参加者 教授1名 東京大学学生 5名 本校1・2年の各クラス代表 16名

ファシリテーター 職員3名

使用ツール Zoom

第1部「教えて、大学のすべて」

- ・パネラー大学生の自己紹介 [2分×5人 10分]

【内容】 自己紹介 コロナ禍の生活・学習状況 自分が取り組んでいる研究

・各クラス代表の質問 [一人3分×16人 50分] 高校生と大学生が1対1で会話をする。

第2部「〇〇を考える会」 1テーマ20分×3回転

【形式】 本校生徒は4人に分け参加 東大生は1～2人ずつ参加

【進行】 ①各自、設定テーマに関する1分間スピーチ

②ディスカッション

【テーマ】

① 同調圧力

日本人の伝統ともいえる、「空気を読む」「自粛」「世間」「他人の目」「友人関係のしがらみ」などの同調圧力は、コロナ禍でも猛威を振るっています。これを論じてみませんか。

② これからの文化活動

コロナ禍で音楽家や舞台芸術、みな苦しんでいます。しかし、ステイホーム中の私たちを支えてくれたのも文化です。これからの文化を論じてみませんか。

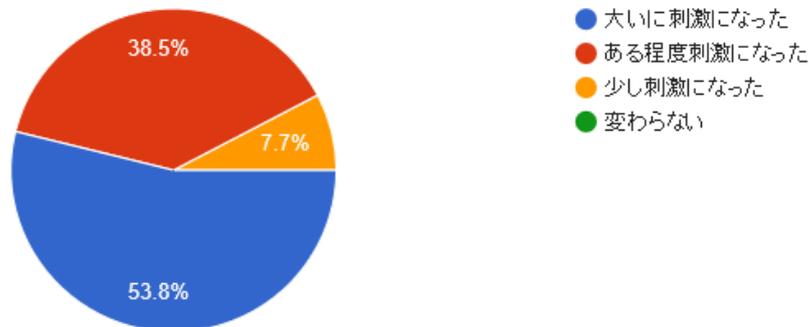
③ 判断基準

コロナ禍で、政治家から一般国民まで、さまざまな場面で判断が問われました。未だに迷うことばかりです。みなさんは何に迷い、何を基準に判断、決断をしていますか。

☆エンディング 感想スピーチ（高校生は質問者順⇒大学生⇒教員）

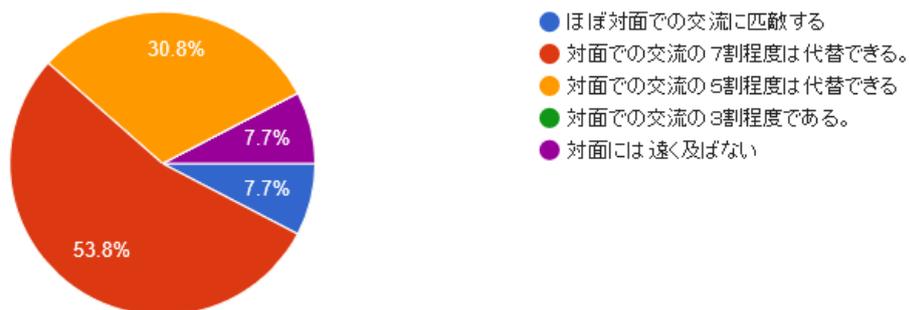
今回のイベントは今後の探究活動の刺激となりましたか？

：

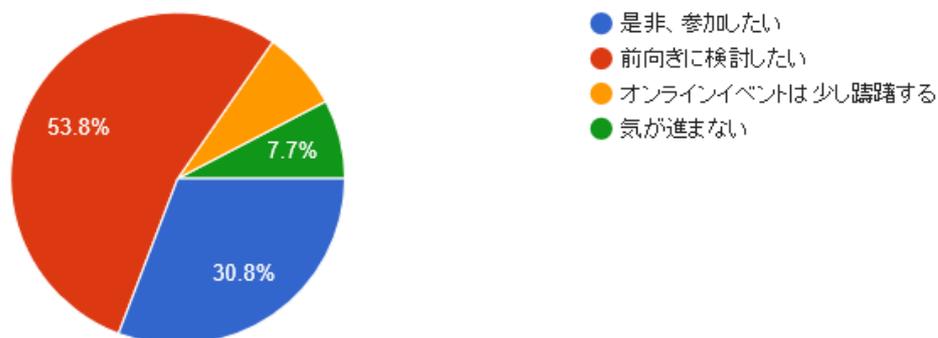


オンラインでの交流は、対面での交流と比較して、どの程度の代替効果があると思いますか？

：



次回、オンライン交流やオンライン課題研究発表会があれば、参加したいですか？



生徒の感想

- 東大生と顔を見てお話できたので、「東京大学」というものをかなりしっかりと感じられた気がする。今後も大学受験にむけ精進していきたい。
- ほんとに貴重な東大生の話を聞くことができたし、討論できたので良かったです
- 話の進め方やたくさんの人の考え方が聞けたり、自分の疑問に対してたくさんの人が意見をくれる、一緒に考えてくれる貴重な経験でした、
- “やはり 対面でないと ラグが 不安をうむ。口の動きや表情が分かりにくいため、英語を聞くだけで理解できない時がある私にとっては、相手の伝えたいことを感じる手段が減って 聞き取ることが辛かった。
- 交流の機会が全くないよりは 海外のことも知ることができ、良かったと思う。質疑応答は出来ないかもしれないが、ビデオで録画して送って でのやりとりでも 良いのではないかと感じてしまった。希望者ではなく全員参加の方がより多くの問題やみんなが考えてることなどを知ることができ良いのではと思う。”
- 始まる前まではとても緊張していましたが、いざ始まってみると次から次へとおもしろい意見が飛び交って、楽しかったです。友達とかとも簡単に議論できたらいいなと思います。本当に今回は貴重な体験をさせていただいて、準備してくださった先生方や東大生の方に感謝したいです。
- ラグやフリーズなどオンラインの課題が見えた気がした
- 自分の考えが広がったのでとても有意義な時間となりました。ありがとうございました！
- いい意味で過度な緊張がなくて発言しやすかったです。佐高生や東大生の皆さんから多様な意見が伺えてとても良い刺激になりました。多角的に物事を捉えて発言している人が多くて、見習いたいなと思いました。参加してよかったです。
- とてもためになるイベントでした。このような機会を設けて下さりありがとうございました。是非皆さんの話を参考にして、充実した高校生活を歩みたいです。
- 今回の経験を生かし、今後の探求学習やその他の授業の活動では、自分の意見を言葉にして伝えることはもちろん、他者の意見も引き出し、様々な意見を組み合わせて、より良い活動にしていきたいと思います。今回のイベントに参加させていただき、ありがとうございました。

(4) 明治大学学生とのオンライン交流会 「若者は、なぜ政治の話をしないのか？」

目的 若者の政治意識をテーマに、大学生・高校生で意見交換を行う。

日時 令和2年9月28日(月) 16:30~18:00

参加者 明治大学 学生 4名 本校生徒 2班(8名) ファシリテーター職員

使用ツール Zoom

進行

1. 大学生の自己紹介(ひとり2分)

・名前 学部 今、研究していること コロナ禍の近況報告

★それを受けて、本校生徒から軽い質問をします。(アイスブレイク目的)

2. 本校の課題研究班 プレゼン 発表5分 質疑5分

3. 知的対話

- 18歳選挙権になって、若者の意識は変わったか？
- 若者は、なぜ政治の話をしないのか？
- 国政選挙等でのオンライン投票導入をどう考えますか？
- 若者の政治への関心を高めるための提案

報告

高校生も大学生も、親しい友人同士ではあまり政治の話をしません。日本には政治の話をする文化がない上に、友人関係特有の気遣いが存在します。かえって、政治の話が目的のネット対話、政治の話を目的を共有する初対面の人同士の方が、政治の話は円滑に進むことを確認しました。



(5) 講演会 「気付く 探る 考える」(2学年対象)

目的 本校 SGH 事業に長年ご協力いただいている東京大学・阿古先生の講演を通して、現代社会の諸課題に目を向け、深く考察する態度を育てる。

日時 9月29日(火) 6・7限

講師 東京大学 大学院総合文化研究科 阿古智子 教授

演題 「“探究”における自らのポジション: 国際政治と中国報道を題材に考える」

報告レポート

現在、日本の報道では「中国」と大きい主語で中国国内の情勢が語られることが多い。その内

容は単純化され、かつ、中国政府が報道規制をかけているので、日本のメディアを通して中国の実態を“民”の視点から捉えることはできない。“民”の視点から中国を研究すべく、対象に関わる際には政府を通さずに、中国で活動している NGO 法人や、ジャーナリストに同行してもらい、研究対象のコミュニティ内でフィールドワークを実施する。研究にあたって、常に意識していることは、自分がどの視点に立って研究しているかを必ず把握しておくことである。

少数民族が、中央政府に窮状を訴える「上訪」に関わり、当該の村を訪れて研究したことがある。その際に、村への保証金や寄付金を地方役人が私財化した形跡を確認した。また、認可を受けていない性労働者を支援する NGO 法人に参加して、性労働者に対する参与観察を行ったこともある。そこでは性労働者の現状だけでなく、彼らの生きた人間としての生活を見ることができた。このような内情は、政府を通じてでは決して発見することができない。いずれも、自らが信頼関係を築きながら参与観察をしてわかったことである。しかし、対象のコミュニティに参加しつつ研究したとしても、対象について当事者と同様に理解を得ることは不可能であり、関わりながら研究を進める中では偏向した見方に陥ることもある。

研究として対象に関わる以上、理解を深め、多角的な視点から観察しなければ研究とは言えない。真に“研究”をするには、自分がどのポジションから事象を観察したのかを把握して、自分の見えている側面と見えていない側面に気づき整理し、不足を補完するにはどの材料が必要なのかを自らに問い続けることが不可欠なのである。

(6) 講演会 「気付く 探る 考える」(1 学年対象)

目的 各分野の専門家を招き、講演を通して、現代社会の諸課題に目を向け、深く考察する態度を育てる。

日時 10月27日(火) 6・7限

講師 東京外国語大学・大学院総合国際学研究院 青山弘之 教授

演題 「世界についてのステレオタイプをどう克服するか：
西アジア・北アフリカ・中央アジア地域をめぐる」

報告レポート

1. はじめに

先日、勤務校の近くにあるイラン料理店で食事をした。中東出身と思われる夫妻が経営しているのだが、その方々を見てふと疑問に思った。「なぜ、あんなにカジュアルな恰好をしているのだろう」と。イスラーム圏の人なのにどうしてと無意識に感じたのである。だが、このとき私が抱いたその感情こそ、青山氏がいう「ステレオタイプの発想」だったのではないかと反省している。本稿では、青山氏の講演を踏まえて、ステレオタイプがもたらす弊害及び我々が異質なものに対してどう向き合えばよいのかを検討したい。

2. 「イスラーム」とは何か

我々はイスラームという言葉を見たとき、何を思い浮かべるか。多くの方は砂漠、石油、テロ、紛争、イスラーム教などをイメージするだろう。では、なぜ我々はイスラームと聞いてこれらの概念を連想するのか。それは、これらの特徴が中東に特有なものとして説明されることが多いからである。つまり、このようなイメージは他の地域と比較したときの特徴として明示されて

いるにすぎない。したがって、これらがイスラームのすべてを語っている訳ではないのである。ならば、イスラームという言葉がどのような意味を含有しているのか、改めて考える必要があるのではないだろうか。

3. 「イスラーム」という言葉が孕むリスク

我々は日頃、「イスラーム教」という表現ではなく、「教」を付けず「イスラーム」という言葉を単独で使う光景を見かける。それには理由がある。「イスラーム」とは単なる宗教に止まらず、政治・経済・文化・社会を包摂したシステムを意味するからだ。そこには「イスラーム=everything」という世界観が広がっており、行動様式すべてをイスラームの教えに従って考える人々が存在する。このようなイスラームの教えを信仰する人々をムスリムと呼ぶが、ひとつ注意しなければならないことがある。それは、すべてのムスリムがこのような世界観を持っているわけではないという事実だ。したがって、すべてのムスリムが断食や礼拝を遵守していると思ってしまうのは、ステレオタイプ的な発想であり、イスラーム教を唯一絶対の価値規範と考えないムスリムも当然存在することを見落としてはならない。

4. ステレオタイプの弊害とその克服に向けて

中東でイスラーム教徒に関係する紛争が起こったとき、我々はその原因をイスラーム教の複雑さを根拠に説明することがある。だが、異質かつ複雑で理解困難な現象に触れた際、それを異質な物の名前を出して説明しても、それでは理解したことにはならない。このような現象を真に理解するには、説明の根拠を異質な物に求めるのではなく、我々に馴染みのある物に置き換えて考える必要がある。だが、日頃から馴染みある物の中で生きている我々にとって、そもそも何が身近な物なのかを把握することは決して簡単ではない。だからこそ、自分たちに馴染みある物を知るために、我々は馴染みのない異質な物に接しておく必要があるのだろう。

冒頭で述べたイラン料理店での出来事のように、私はあのとき自分に馴染みのない異質な物に触れ、「なぜ？おかしいな」という感情を無意識に抱いてしまった。それを「変だ」と思うのではなく、異質な物を決して否定せず理解しようと努める態度を取るべきだったのではないか。そうした態度を持って向き合うことが、異質な物との意識的共存への第一歩なのかもしれない。

